

1. 「ペルー南海岸ベンティーヤ遺跡の発掘調査」

山本睦 (山形大学)

坂井正人 (山形大学)

ホルヘ・オラーノ (山形大学)

松本雄一 (山形大学)

ベンティーヤ遺跡は、ペルー南海岸のインヘニオ谷南岸に位置し、同谷で最大規模を誇るナスカ期（紀元前 100-紀元後 600 年）の遺跡である。

先行研究によればこの地域には、ナスカ期において多くの地上絵が集中的に分布するナスカ台地をはきんで、南のナスカ谷のカワチと北のインヘニオ谷のベンティーヤという二大センターがあったとされる。そして、カワチに関しては、長期にわたる発掘調査と土器分析の成果にもとづいて、パラカス期からナスカ期（紀元前 500-紀元後 500 年）における中心的な祭祀・巡礼センターであったことが指摘されている。その一方、ベンティーヤ遺跡では、発掘調査が実施されたことはなく、その詳細は不明であった。

インヘニオ谷では現在、80 年代に実施された遺跡分布調査データを精査し、セトルメント・パターンおよびその変遷を把握することを目的として、山形大学のチームによって集中的な考古学調査が実施されている。その一環として、2015～2106 年には、ベンティーヤ遺跡で発掘調査がおこなわれた。

発掘調査の主目的は、考古学的基礎データの獲得、とくに基礎編年を確立するために、建設プロセスの把握とそれに対応した考古遺物の時代的变化の把握であった。そして、遺跡内の各建造物の機能やその関係性を同定することも目的の一つとされた。

発掘調査の結果、ベンティーヤ遺跡では大きく 3 つの建設フェイズがあることが確認された。現在、出土遺物は分析中であり、放射性炭素による年代測定も実施していないため、詳細な年代については不明である。しかしながら、周辺地域をふくめた先行研究との比較によれば、ナスカ 1～5 期の土器に対応した建設活動があったことは明白である。

本発表では、ベンティーヤ遺跡におけるここまでの成果を、とくに建設プロセスと出土土器との関連に重点をおいて総括する。また、インヘニオ谷のセトルメント・パターン調査の成果も考慮し、カワチ遺跡との比較検討をふまえながら、同谷のナスカ期における社会変化についての仮説的見解を述べる。

2. 「通過儀礼から見た祭祀建築の一生：ワリ国家の D 字形建築を事例として」

土井正樹 (山形大学)

本発表では、近年ワリ国家の祭祀建築として注目されるようになった D 字形建築を対象

とし、その建設から放棄までの節目において実施された儀礼の痕跡に注目することにより、D字形建築が当時の人々にどのように扱われ認識されていたのかを明らかにすることを試みる。

ワリ国家は、現在のペルーを中心とする中央アンデス地域の編年において、中期ホライズン（紀元後600-1,000年）と呼ばれる時期にペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷を中心に栄え、中央アンデス地域の山岳部および海岸部にひろく政治的影響力を及ぼしていたと考えられている。D字形建築は、最近になりワリ国家の祭祀施設として認識されるようになったものであり、円形建築の壁の一部が直線になった、いいかえれば平面プランがアルファベットのDに似た形態をしているという特徴を有している。ワリ国家に関する考古学的調査の進展により、近年ワリ国家に関連する中央アンデス地域各地のD字形建築に関する発掘資料が増加しつつある。とくに最近では、ワリ国家の首都であるワリ遺跡からD字形建築に関する興味深い発掘資料が報告されている。しかしながら、D字形建築に関する研究としては、個別遺跡の発掘資料の提示にとどまるものが多く、D字形建築全体を対象として、その機能や当時の人々によってどのようにそれらが認識されていたのかを明らかにしようとする研究は少ない。

本発表では、発掘調査が行われている複数の遺跡のD字形建築を対象とし、通過儀礼という視点から分析する。通過儀礼とは、誕生、成人、結婚、死といった人生の節目に実施され、本来連続的である人生に区切りを付け、ある段階から別の段階への移行を特徴付けるものである。これをモノに適用した場合、大きく製作（誕生）、使用（生活期）、廃棄（死）の段階としてとらえることができる。本発表では、D字形建築が当時の人々によってどのように認識されていたのか明らかにするために現在行っている、D字形建築の通過儀礼に関する分析の経過について報告する。

3. 「ワリ期の人物表現について-ペルー北部高地カハマルカ地方の事例-」

渡部森哉（南山大学）

インカ帝国はインカ族が80を超す他の民族集団を支配した多民族国家であったとされる。そして各民族集団は頭飾りや服装が決まっており、他の地域に移動してもそれらを変更することが禁止されていたという。しかしこうした多民族状況を考古学データから復元することは難しい。服や頭飾りが発掘調査で見つかることはまれである。また行政センターなどから出土する土器の多くはインカ様式であり、多民族状況から予想されるような多様な土器が見つかることはない。またインカ文化では人物表現が極端に少ないため、図像表現の服や頭飾りを分析するという方法も有効ではない。

ワリ期（後700-1000年）は中央アンデス中央高地南部のワリ遺跡を首都としたワリ帝国が台頭した時期とされる。後のインカ帝国の祖型と見なされるが、ワリ国家もインカ帝

国と同様に多民族国家であるとすれば、どのようにそれを議論できるであろうか。インカ期にはインカ様式の土器が各地の遺跡にほぼ例外なく見つかり、特に行政センターでは出土土器の大部分を占めることが多い。しかしワリ様式土器は、ワリ帝国の勢力範囲内で見つかるものの、非常に少数である。ワリ関連遺跡では、出土土器の大部分を占めるのは在地の土器であり、ワリ様式や他の地域の土器が共伴するというのが一般的なパターンである。また前時代と比較して、ワリ期には1つの遺跡で見つかる土器の種類は増加する。土器に着目するとワリ期は統一性が強まるのではなく、むしろ多様性が増す時期であると言える。民族を示す物質的指標があれば考古学的に議論できるが、土器様式そのものが民族集団と1対1で対応するかどうかは慎重に検討する必要がある。

本発表では、土器様式の多様性のみならず、ワリ文化における人物表現に注目し、それがワリ帝国の多民族状況を示すのか、あるいは役割の違いなどを示すのかどうかを検討する。ペルー北部高地カハマルカ地方を事例とし、特にワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオ遺跡出土遺物を分析する。

4. 「ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市における学校教育と博物館に関する調査速報」

五木田まきは（金沢大学大学院博士後期課程）

本発表は、ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市において2015年と2016年に行った学校の博物館利用に関する実態調査の結果を提示し、当該地における学校教育と博物館の連携へむけた現状と課題を明らかにし、今後の展望を考察するものである。

コパン・ルイナス市はホンジュラス共和国西部コパン県にあり、ユネスコ世界文化遺産の「コパンのマヤ遺跡」を有する市である。コパンは国内有数の観光地であり、遺跡公園内に加え、町の中心部には複数の博物館が設置されている。長年にわたり国内外の研究者により調査が行われてきた遺跡そのものとは対照的に、町中に建てられたこれらの博物館の機能や地域社会との関係については、これまで研究の焦点が当てられてこなかった。では、地域住民たちは博物館をどのように利用し、博物館に何を期待しているのか。そして博物館は地域社会にどのように関わり貢献することができるのか。こうした問題意識のもと、2015年9月にコパン・ルイナス市において、博物館利用と博物館に求める機能について、博物館職員、一般市民、学校教員を対象とした聞き取り調査を行った。調査の結果、在住年数に関わらず一般市民は博物館利用の経験を持つが、今後期待する機能として主婦層を筆頭に博物館と学校教育の連携が挙げられた。学校教員もその意欲はあるものの、博物館側の体制や人材不足により実現に繋がらないという実態が明らかになった。

さらに、2016年7月から8月にかけては、2015年12月に新たに開館したコパン・デジタル・ミュージアムを拠点とし、学校教育の枠組みにおける博物館利用の現状と課題を

明らかにすることを目的とした現地調査を実施した。調査方法は、博物館における参与観察、及び博物館職員と学校教員を対象とした聞き取り調査である。

以上のように本発表では、2015年9月、及び2016年7月から8月にかけて行った現地調査を概報し、教育という側面から地域社会と博物館の関係構築への現状と課題、そして今後の道筋を考察する。

5. 「コパン周縁に見られるモザイク石彫」

平尾雅代（金沢大学大学院博士後期課程）

ホンジュラス西端部のコパンでは、王朝創始期の建造物装飾は漆喰であったのに対し、7世紀～9世紀にはモザイク状の石造彫刻（以下、モザイク石彫と呼ぶ。）を嵌め込んだ装飾が見られる。コパン周縁の地方センターに見られるモザイク石彫に関しては、未だ十分に研究されておらず、地理的にどの様な広がりを見せ、どの様なものが表現されていたのかは未だよく分かっていない。

そこで、地方センターのモザイク石彫データを一点でも多く収集し分析するために、以下3つの活動を現地で行っている。

- 1、既に収集されているモザイク石彫に関する資料（写真、野帳、手記、定期報告書、図面など）の収集
- 2、1、の資料を用いて、寄贈品などの出所不明のモザイク石彫の出所や寄贈経緯の同定
- 3、遺跡から持ち出され、近現代建築物に再利用されたモザイク石彫の確認と写真データ収集

現在、確認されている地方センターのモザイク石彫は、発掘調査、試掘、踏査によって採集されたものもあるが、1983年から1993年に実施されたラ・エントラダ考古学プロジェクト第一、第二フェーズ期間に、地主などから寄贈されたものが多く、石彫研究をする上で重要な位置を占めている。モザイク石彫自体はラ・エントラダ市の収蔵庫に263点保管されているが、それらに関する資料（写真、野帳、手記、定期報告書、図面など）の多くは残念ながら散逸しており、寄贈経緯や出所場所などが分からなくなっている。そのため、学術資料として使用可能なレベルにする作業を行っている。

その結果、263点中186点については出所（寄贈経緯もしくは、採取遺跡）を同定する事ができた。

また前述のプロジェクトにおいて、遺跡から持ち出され、教会や個人宅に再利用されたモザイク石彫の存在も確認されている。そこで、実際に現地へ行き、合計約160点のモザイク石彫を視認することができた。可能な限り、写真撮影や寸法計測などのデータ収集を行った。

6. 「ホンジュラス、コパンのマヤ遺跡における発掘調査—2016 年度の概要紹介—」

中村誠一（金沢大学）

マヤ文明を代表する世界遺産の一つであるホンジュラスのコパン遺跡では、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所により、日本政府から供与されたノンプロ無償資金協力のホンジュラス側見返り資金を原資として、2009 年の政変で中断した大規模な発掘調査が本年度から再開された。場所は、コパン遺跡大広場の北に位置する通称「ヌニェス・チンチージャ」グループと呼ばれる二つのエリート居住区域である。発表者は、ホンジュラス政府より前フェーズから引き続きプロジェクトの総合ディレクターを委託され、コパン遺跡公園を地域の文化資源として保存しつつ活用していく先端事例であるこのプロジェクトを指揮している。文化資源学的観点からのプロジェクト活動の大きな特徴の一つは、発掘・修復現場を毎日、一般に公開し、その作業を常時近くから内外の観光客に見てもらい双方向的に交流するというこれまでに前例のない公開法を取っている点にある。

一方、考古学的観点からの今年度のプロジェクト活動では、グループ全体の最大建造物である建造物 9L-105 を主要なターゲットとして発掘調査が行われた。この建造物は、その全体規模や主部屋の広さ、部屋内のベンチの規模、使われている切石ブロックの質などから、周辺の建造物とは一線を画し、このグループの長と思われる権力者の家であると考えられた。発掘調査を進めた結果、2016 年の秋までに、主部屋の前庭部の地表下約 2 メートルの地点から埋葬 5 体が見つかり、そのうち 3 体にはかなり豪華な副葬品が相伴していた。しかしながら、発表者は、これらの埋葬は主部屋のベンチ下に埋まっている可能性のある、より高位の中心的人物に捧げられたいけにえ埋葬あるいはあの世への相伴埋葬ではないかと考えている。

この発表では、コパン遺跡における最前線の調査成果を報告し、コパン政治文化史にこのグループやこれら特異な埋葬が持つ意味について考察する。

7. 「パコパンパ遺跡カハマルカ期ミニチュア土器の分析」

中川渚（総合研究大学院大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

ペルー北部山地に位置するパコパンパ遺跡は形成期の神殿遺跡であるが、カハマルカ期の儀礼的再利用の痕跡や、同時期に形成期の建築物を封印した痕跡も確認されている。本発表では、パコパンパ遺跡第 3 基壇の方形半地下式広場より出土した、ミニチュア土器の

分析結果を提示し、カハマルカ期の儀礼的再利用について検討する。

ミニチュア土器は、2006年~2008年および2013年~2015年に実施された同広場の発掘調査によって、半完形および完形、破片の状態で出土しており、半完形以上のものでも約500点を数える。方形半地下式広場は形成期に建設され、主にこの時期に利用されたものであるが、これらのミニチュア土器は共伴する精製土器からカハマルカ前期（紀元後250-400年）のものと推定され、カハマルカ期に広場内で行われた儀礼の痕跡と考えられる。ミニチュア土器の器形は、そのほとんどが短頸壺であるが、甕や鉢の形状を持つものもある。約500点のミニチュア土器の口径、胴部径、器高など各部位を計測し、詳細な器形分類を行った。さらに、これらの器形、色、製作方法などの属性について記録し、広場内における分布状況および広場内に位置するカハマルカ期の建築物との関連性について分析した。その結果、広場内でも分布に差があることが明らかになった。本発表ではこの分析データを元に、この儀礼が複数集団によって行われたものである可能性について検討する。このように大量のミニチュア土器を供える類例としては、モチェやシカンの墓に供えられたものが報告されているが、パコパンパ遺跡の場合は広場内に供えられており、モニュメンタルな墓を伴わないことから、その用い方は北部海岸とは異なっていたと考えられる。本発表では今後の展望として、このようなペルー北部におけるミニチュア土器利用の文脈の違いについても触れる。

8. 「ペルー、パコパンパ遺跡から出土した人骨の生物考古学的研究 —2016年度調査報告—」

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）

関雄二（国立民族学博物館）

鶴澤和宏（東亜大学）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ遺跡は、ペルー北高地の形成期の祭祀遺跡である。2015年の北側基壇の発掘では、蛇ジャガー・神官の墓から2体の被葬者が発見された。北側被葬者の腹部付近にはジャガーの顔とヘビの胴体をもつ黒色象形鏡形壺1点が発見され、その深層の南側被葬者の頸部付近からは金製の飾り玉からなる首飾りが発見された。また、南側被葬者の頭頸部付近からは、赤色顔料が検出された。人骨の人類学的な鑑定の結果、北側被葬者は右距骨が南側被葬者の足の位置で発見されたものの、それ以外の部位は解剖学的位置を保って出土した。死亡年齢は35~54歳であり、性別は女性であった。また、推定身長は140.5cmであり、パコパンパ遺跡の女性の平均身長よりも約10cm低身長であった。人工頭蓋変形の有無は不明であった。一方、南側被葬者は解剖学的位置を保って出土した全身骨であっ

た。大腿骨の遠位端、小転子、大転子、脛骨近位端、腓骨近位端は未癒合であり、大腿骨近位端と腓骨遠位端は癒合中であつた。第3大臼歯は歯根が1/4形成されており、歯の咬耗はまったくなかつた。恥骨の形態的特徴や歯の咬耗により死亡年齢は15歳前後と推定できた。性別に関しては、15歳前後という年齢ゆえに性的二形が不明瞭であるものの、恥骨下部の腹側弧がなく恥骨体の幅が狭いという点は男性的である。頭蓋冠片が残るが保存状態が不良で、項稜は未発達でやや平坦であるが、人工頭蓋変形の有無は不明であつた。上顎では、左右側切歯と右犬歯が先天喪失し、右中切歯は歯槽に上下逆さに埋没していた。下顎では、左側切歯が先天喪失し、オトガイ結節の発達が見られた。これまでパコパンパ遺跡で発見された金属製品を伴う貴人墓は女性の埋葬を中心としていたが、今回発見された人骨は若齢の男性の可能性があり、パコパンパ遺跡の貴人墓の埋葬者には成人女性だけではなく多様な人々がいたことが示唆された。

9. 「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテクストから出土した動物骨資料：饗宴との関係を中心として」

鶴澤和宏（東亜大学）

ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

関雄二（国立民族学博物館）

パコパンパ神殿中央基壇の中心部に等間隔で配置された複数の土坑から、銅製品、骨角器、石器などとともに、動物骨が検出されている。本資料については2014年に分析を行い、同年の本学会において、動物種、部位の構成等について概要を報告している。その後、調査の進展にともなう、土坑への埋納のほかにも儀礼行為と関係する動物利用の存在が明らかになってきた。動物の利用を伴う複数の儀礼行為がどのような目的を持って行われたのか、またそれぞれの儀礼行為のあいだには何らかの相互関係が見出されるのか、具体的に検討できる条件が整ってきたといえる。

本発表では、土坑出土の動物骨資料と他の儀礼的コンテクストから検出された資料との比較結果を報告し、複数の儀礼行為が相互に関係して行われていた可能性を指摘する。土坑資料と比較したのは、北基壇に設けられたパティオで検出された饗宴の残滓である。同定標本数2,411点からなる資料には、異なる生態環境に生息する7種の動物が含まれ、骨には解体痕のほか犬やネズミによる食痕が観察されている。こうした骨資料の特徴から、生息地の異なる動物が饗宴にあわせて神殿に搬入されるようあらかじめ計画されていたこと、饗宴後は食べ残した骨が放置されていたことが明らかとなっている。今回、土坑資料を再分析した結果、動物骨には、(1)少なくとも6種の哺乳類が含まれ、(2)解体痕および動物による食痕をとまなうこと、(3)出土部位にはばらつきがあり身体のごく一部が埋納

されていること、(4)異なる保存状態を示す破片が接合する事例があることなどが確認された。土坑資料と饗宴資料の保存状態には共通点が多く、土坑資料が饗宴の残滓を部分的に抽出したものと想定すると、部位の偏りが大きいこと、保存状態の異なる破片が含まれることなども説明できる。土坑への埋納儀礼に先立ち、饗宴が行われていた可能性が示唆される。

10. 「ペルー北部高地パコパンパ遺跡における形成期後期の C4 資源利用」

瀧上舞 (山形大学)

関雄二 (国立民族学博物館)

長岡朋人 (聖マリアンナ医科大学)

鶴澤和宏 (東亜大学)

ダニエル・モラーレス (ペルー国立サン・マルコス大学)

米田穰 (東京大学)

形成期の中央アンデス地帯において、トウモロコシがいつ頃、どのように受容されていたのかというテーマは多くの研究者が注目するところである。トウモロコシ遺存体や花粉分析、デンプン粒分析から、その栽培は形成期初期には始まっていたと考えられている。しかし、同位体分析による摂取量の評価では、C4資源の利用量の増加は形成期より後の時代に生じたという報告が広く受け入れられている。一部の遺跡では、形成期後期にC4資源のやや高い摂取量が報告されているが、同一遺跡での食性の時代変化は確認されていない。

さらに、集団内での食料摂取の個人差も注目される。中央アンデス地帯では、トウモロコシ栽培が権力者集団の台頭に関係しているという指摘もある。また、祭祀におけるチチャの利用も形成期に始まっている可能性が指摘されており、特に権力の萌芽がみられる形成期中期から後期にかけての神殿遺跡で、特別に埋葬された人々とそうでない人々の間で食性に違いが生じていたことも想定される。しかしながら、形成期の遺跡内での食性の個人差についてはほとんど検証されていない。

そこで本研究では、ペルー北部高地のパコパンパ遺跡から出土した動物骨と古人骨を用いて、食性の時代差と集団内での食性差を検証した。炭素・窒素同位体比を用いた食性推定の方法は広く知られているが、部位による同位体比の違いを利用した食性推定の報告はまだそれほど多くない。骨コラーゲンは特にタンパク質源の同位体比に強く影響されるが、歯のエナメル質中のヒドロキシアパタイトは摂取した全食物の平均的な同位体比を反映する。そのため、骨コラーゲンとヒドロキシアパタイトの同位体比を比較することで、摂取されたC4資源の内、C4植物とC3植物を食べた動物のどちらの影響が大きいのかを検証することができる。ただし、骨と異なり、歯は形成時期が早いため、反映している食性期間に注意が必要である。本研究では、授乳や幼少期の食物の影響を避けるため、第三大臼歯を用いて分析した。

動物骨と古人骨の分析の結果、パコパンパ遺跡では、形成期後期にC4資源（トウモロコシか、トウモロコシを与えられたクイもしくはラクダ科動物）の摂取量が増加したことが示された。さらに、ヒトの歯の分析の結果、タンパク質源の炭素同位体比よりも、全食物の炭素同位体比の方が高いことが示された。すなわち、トウモロコシの摂取が示唆される。また、集団内での社会的差異に伴うC4資源利用について統計学的有意差は見られず、

集団内で食性差があるとは言えない。同時代のクントウル・ワシ遺跡では、金属製品を副葬品に持つ個体で低いC₄資源摂取が報告されており、中央アンデス地帯の北部高地内において、トウモロコシの受容と利用方法が遺跡によって異なっていた可能性が示唆された。ただし、これまでの形成期の同位体分析の多くは骨コラーゲンを用いており、今後はエナメル質中のヒドロキシアパタイトの分析数を増やしていく必要があるだろう。

1 1. 「トラランカレカ遺跡2016年調査概報」

福原弘識 (埼玉大学)

メキシコ中央高原で発生したテオティワカン国家は、それ以前に衰退していった先行社会との歴史的連続性の上に成立している。初期国家形成のプロセスを実証的に解明するためには、メキシコ中央高原の形成期社会を理解することが重要である。テオティワカンは、形成期終末期（前100年~後250年）ごろに都市化し、初期国家へと変遷を遂げた。一方、形成期を通じてメキシコ中央高原に発達してきた多くの集落は、紀元後1世紀ごろと推測されるポポカテペトル火山の噴火やそれに連動した地域社会の衰退と社会的混乱により衰退した。イスタシワトル山東麓に位置するトラランカレカ遺跡（前650-後200/250）は、形成期中期から形成期終末期におけるメキシコ中央高原で、最も大きな都市センターの一つであったが、他の集落と同様、形成期終末期に衰退した。

トラランカレカは形成期中期に利用が開始され、形成期後期に都市の大規模な改変がみられ、形成期終末期に都市が大規模に拡張された。公共建造物が集まる遺跡中心部は、形成期中期から利用され、東西に伸びる舌状台地上に位置する。一方、形成期終末期の都市の拡張では、舌状台地外周の南北に都市が広がった。調査対象地区はこの北側地区の緩やかな丘陵上にある。

本発表では、2016年にトラランカレカ遺跡の北側周縁部でおこなった地形測量と発掘調査の概要を報告する。発掘調査では、南北に30メートル以上の長さを持つ低層の基壇が検出された。遺物構成からは発掘区周辺が居住区として利用されていたことが示唆されるため、この基壇は居住地区における公的な空間の一部であったと推測される。発表ではメキシコ中央高原における社会-政治の大きな変革期における当該地域社会の変遷過程を視野に入れながら、都市の拡張と居住地区における公的空間利用について述べる。

1 2. 「サン・アンドレス遺跡における新たな石造大基壇の発見とその意義」

市川彰 (名古屋大学高等研究院)

本発表ではエルサルバドル共和国サン・アンドレス遺跡において新たに発見された石造大基壇の詳細とその意義について、2016年の調査成果に基づき報告する。

発表者らはマヤ南東端地域の考古編年の精度を高め、メソアメリカ文明の社会変動に関する通時的比較研究の基盤を形成するためにサン・アンドレス遺跡を調査している。2016年は5号建造物を調査した。同建造物は、直径約40m、高さ約13mピラミッドと、それを支える南北約90m、東西約80m、高さ7mの大基壇から成る。この大基壇部分の発掘調査によって石造大基壇は発見された。

石造大基壇は、形状は階段状で、少なくとも4段造り、高さは約6mある。イロパango火

山灰のほぼ直上に築造され、古典期後期（600～900年）に主に見られる日干しレンガ（アドベ）の建築に覆われている。このことから後450～600年ごろの所産と推測される。

この発見の重要な点は2点ある。ひとつめは、石造大基壇がイロパンゴ火山灰のほぼ直上に築造されている点である。これはイロパンゴ火山の巨大噴火後、これまで考えられていたよりも短期間で公共祭祀建造物が建造され始めたことを示唆する。ただし、今後は年代測定データや詳細な土器分析結果をふまえて慎重に検討していく必要がある。

ふたつめは、石造建築であるという点である。サポティタン盆地を含むエルサルバドル西部やグアテマラ南部高地の先古典期から古典期前期にかけては土を主たる建築材としており、この石造建築は異質である。時期的に先行もしくは同時期の所産とされる石造建築はエルサルバドル東部に所在するケレパ遺跡で見られる。したがって、イロパンゴ火山の噴火後に、一時的に東部の影響が一気に西進し、伝統的な土の建築にとって代わり、複数の石材を獲得・運搬・建築に運用する知識や技術が導入された可能性がある。また建築の恒久性という点を考慮した場合、その後の時期に、石からアドベに転換するという点も興味深い事例である。



図1 サン・アンドレス遺跡で新たに発見された石造大基壇

13. 「チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区の放射性炭素年代測定 —マヤ南部地域先古典期～古典期土器編年の再構築にむけて—」

深谷岬（名古屋大学大学院）

伊藤伸幸（名古屋大学）

012年から2015年のエル・トラピチェ地区の発掘調査で出土した先古典期から古典期前期に属する土器の分析と、放射性炭素年代測定の結果を報告する。

チャルチュアパ遺跡はエルサルバドル共和国西部に位置し、先古典期から後古典期にわたる人々の活動の痕跡が確認されている遺跡である。チャルチュアパ遺跡の土器編年は、1978年、ロバート・シャーラーによって発表された。この土器編年は、現在でも指標編年として広く利用されている。シャーラーはセラミックコンプレックスの年代を決定するために放射性炭素年代測定を実施しているが、測定した資料は7点のみであり、年代測定データの不足は問題点のひとつと言える。また2014年には、猪俣健らによりマヤ南部地域を代表するカミナルフユ遺跡の調査研究に基づいた新しい先古典期土器編年案が提示され、当該地域の各遺跡編年の再考が求められる状況にある。チャルチュアパ遺跡についても、他の遺跡と同様に従来の編年よりも年代が下る可能性が指摘された。

そこで発表者らは、カミナルフユ遺跡同様にマヤ南部地域の代表的な先古典期遺跡のひとつであるチャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で、新たに出土した土器資料を分析し、炭素試料を用いて不足している年代測定データを補い、先行研究で示された同遺跡の二つの土器編年を検証する必要があると考えた。現在も土器の分析は進行中であり、現時点では最終的な結論は提示しない。したがって本発表では調査速報と題し、近年エル・トラピチェ地区で出土した土器と年代測定の最新のデータを提示し、マヤ南部地域の先古典期～古典期土器編年に関するデータを共有することで、編年研究の進展の一助としたい。これまでに得られたデータは、二つの編年の範囲内に収まる結果となり、精緻化するには至らなかった。しかし、カイナック期とベック期のはじまりについては今後慎重に検討する必要があることが明らかとなっている。

14. 「アンデス形成期の神殿後背地研究を始めるにあたって」

芝田幸一郎（法政大学）

宮野元太郎（芦屋大学）

アンデス形成期に関する調査は、主に神殿遺跡を対象として実施されてきた。これには積極的・消極的双方の理由があるが、いずれにせよ一般居住地・耕作地・採掘地・墓地などを含む「後背地」の調査研究は断片的なものにとどまってきた。発表者もまた、長らく神殿遺跡の調査研究に集中してきたが、神殿に伴う饗宴廃棄物の発見などを契機として、

神殿の建設・維持や饗宴への参加・運営を担っていたであろう周辺住民に関するデータ収集の必要性が浮上した。また、近年の好景気や国家的灌漑プロジェクトの進展により、発表者らの調査地域を含むペルー海岸部では耕作地の拡大が著しい。これに伴い、重要性を看過されやすい後背地関連遺跡の破壊は喫緊の問題でもある。

発表者は、ペルー北部アンカシュ県海岸地方のネペーニャ川下流域にて、2002年以来2つの神殿遺跡の発掘を実施してきた。2016年からのプロジェクトは、これまでの発掘成果や、同時期に行われた他調査隊の成果も利用しながら、ドローンを用いた表面調査によって形成期の後背地関連遺跡と思われるものを絞り込み、その後の発掘調査を充実させるための予備調査と位置づけられる。

本発表では、この8月にネペーニャ川下流域のセロ・ブランコおよびワカ・パルティエダ両神殿遺跡の周辺エリアで実施した短期実験的調査の成果を速報し、併せて海岸地方における予備調査段階でのドローン投入の有効性を示す。具体的には、60-70年代に行われたProulxらのシステムティックな踏査で、前期中間期や中期ホライズンと時期比定された複数の遺跡が、形成期後期に属する居住地および居住地-祭祀複合である可能性が浮上した。また先行研究では未報告の、埋葬儀礼に関すると思われる遺跡も確認したが、これもまた形成期後期と推定されるものであった。これらの小規模遺跡と、主要神殿遺跡との関係を予備的に考察し、今後の調査研究の展望を示す。

15. 「コトシュ遺跡第4次発掘調査ーコトシュ・ミト期の新知見を中心にー」

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

セサル・サラ（ペルーカトリカ大学）

1960年代、ペルー共和国ワヌコ州、ワヤガ川上流域のコトシュ遺跡 KT マウンドにおいて、東京大学アンデス地帯学術調査団はコトシュ・ミト期（先土器期末期／形成期早期）の神殿建築群を発見した。土器に先立つ神殿の存在をはじめて層位的に立証したという点で、これは大きな成果であった。ただしコトシュ・ミト期の編年研究の遅れは大きな問題として残った。著名な壁面レリーフが出土した「交差した手の神殿」や、白い上塗りをとどめた「白の神殿」といったコトシュ・ミト期の建築は、文化財としての重要性ゆえに撤去することはかなわず、それらの下層により古い建築が埋もれているかどうかは未検証に終わったのである。また放射性炭素絶対年代測定が試みられたが、技術的な限界により、精度の高い測定結果は得られていなかった。そのため、コトシュ・ミト期の開始年代は前2500年、終了年代は前1800年という暫定値が与えられたが、検証されないまま半世紀が過ぎたのである。海岸部で紀元前3000年に近い年代を示す神殿遺跡の知見が増えた今日、海岸部と山地の神殿の年代を正確に比較することは、文明の形成プロセスを研究する上で必須の課題である。

たとえ発掘が小規模であっても、最小限の炭化物サンプルを採取すれば、東京大学総合研究博物館放射性炭素絶対年代測定室が導入したコンパクト AMS により、高確度な年代測定が可能である。申請者は共同して 2015 年 8 月にコトシュ遺跡で測量を行い、小規模な発掘は十分に実現可能であるとの結論に達し、2016 年 8～9 月に発掘を実施した。KT マウンド東半分においてコトシュ・ミト期の複数の建築が重層的に埋もれており、さらに初めて土器が導入されたコトシュ・ワイラヒルカ期の建築がそれらを覆っていることを確認した。また交差した手の神殿においては、より下層の床面、さらにその下層の床面を確認した。すなわちコトシュ・ミト期の中でも終末期の遺構と、これまでで最も下層の遺構を検出したことになる。各遺構に対応する炭化物サンプルを採取してあり、今後年代測定を進めていく。

16. 「『エクアドル地震2016』による文化財被害」

大平秀一（東海大学）

2016 年 4 月 16 日、エクアドル共和国マナビ県北端部を震源とするマグニチュード 7.8 の「エクアドル地震 2016」が発生した。これにより、同国海岸部は甚大な被害を受けた。エル・テレグラフ紙によれば、この地震による犠牲者は 671 名におよび、8690 名がいまだに避難生活を余儀なくされている。その被害の大きさが故に、被災・救援状況は各国メディアにより取り上げられ、その一部は日本でも報道された。しかし文化財被害に関する報道は僅少で、得られる情報は限られている。

発表者は、2016 年 9 月 2 日～15 日にわたって、国際交流基金の事業の一環として、地震による文化財の被害状況調査を実施した（事業名：「『エクアドル地震 2016』による文化財被害の実状把握」、主催：国際交流基金、共催：在エクアドル日本国大使館、協力：文化遺産国際協力コンソーシアム）。本調査では、エクアドル文化遺産省の協力を得て、同国海岸部の主要博物館において被害の実状を把握し、また各都市の文化遺産庁（INPC）等において情報収集を行った。この結果、エクアドル海岸部の大半の博物館は、多かれ少なかれ何らかの被害を受けていることが確認された。中には、ケース内の展示物転倒・破損、展示ケースの転倒・破損といった深刻な被害を受けている博物館も認められた。

一方で、文化財被害への対処は遅々として進んでいない。展示品にかけられた保険、予算、専門家の総数・配置等の問題に加え、日本の「文化財レスキュー事業」のように、緊急時の専門家動員の体制が整っていないことなどが障壁となっている。また文化財被害に対する社会的関心の低さも、少なからず影響しているように思われ、ラテンアメリカにおける文化財の社会的意味・意義・位置づけという根幹の問題が露呈されているようにもみえる。一部の地域では、この問題と軌を一にする盗掘行為が、増加・横行し始めてもいる。

本発表では、「エクアドル地震 2016」による文化財被害の実状を報告し、その被災をめぐる社会動態の考察も行いたい。その上で、国境を越えた文化財保護の支援の可能性も探って

みたい。

17. 「メキシコ西部、ハリスコ州ロス・アルトス地域における踏査概報」

吉田晃章（東海大学）

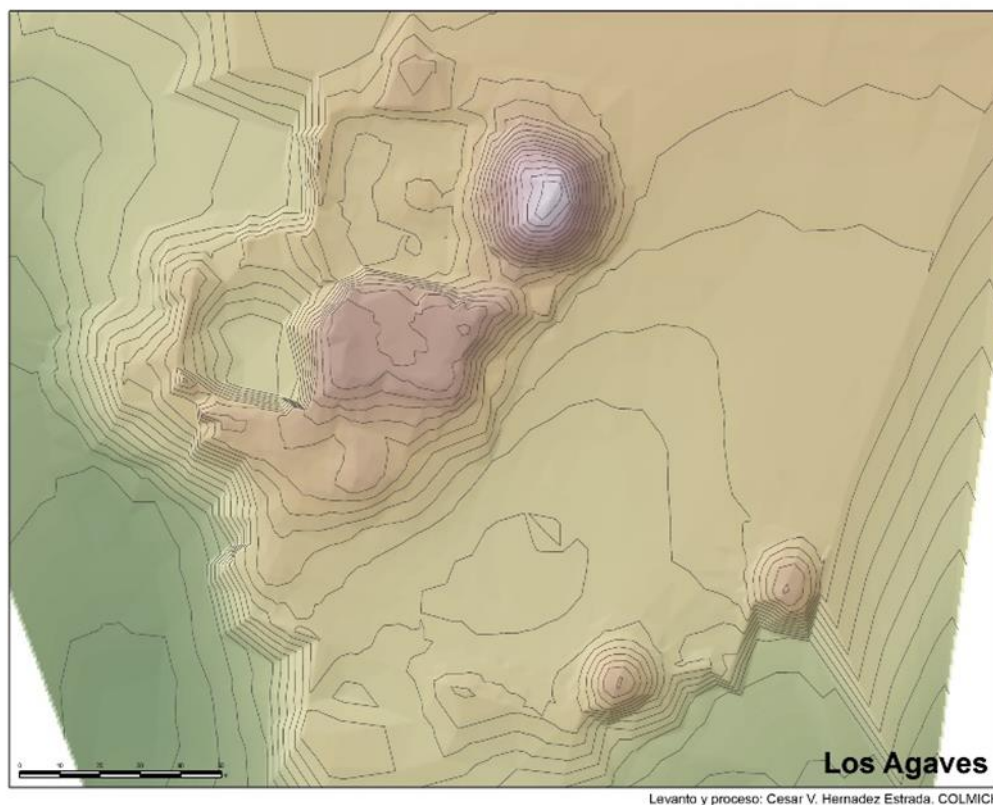
ロドリゴ・エスパルサ（ミチョアカン大学）

フランシスコ・ロドリゲス（プレサ・デ・ラ・ルス調査団）

本発表は、2016年3月と8月から9月にかけて行われたメキシコ西部ハリスコ州、ロス・アルトス地方およびエル・バヒオ地方における踏査概報であり、吉田が研究代表者を務める「メキシコ西部地域の埋葬文化から探る文明間の交流」（基盤研究(B)：平成26年～28年）の2回目の踏査速報にあたる。本研究は先古典期の埋葬文化に焦点を当てたものであるが、今回は2017年春に発掘を予定している同地域のロス・アガベス遺跡と近郊の岩絵について報告する。同遺跡は、中心部分が6haほどの小規模遺跡で、ペラルタ遺跡などのエル・バヒオ地方に見られる古典期の建築に類似したピラミッド複合を有しており、その影響下にあったことが推測される。ピラミッド状基壇など複数の基壇によって構成される方形の広場の中央には、小さな基壇と思われる隆起が確認されている。さらに大マウンド頂上から南に約100m離れた地点には、直径30mほどのマウンドが二基分布していた。立地の観点から特筆すべきは、周囲には、ロス・アガベスのマウンド以外、目立った建造物が見られない点である。現在、遺跡を取り囲むアガベ畑には、彩色土器や黒曜石、バハレケが点在していたが、残念ながら踏査では構造物が確認できなかった。

また、ロス・アガベス遺跡から1kmほどはなれた小川の両岸には、多数の岩絵が確認されている。渦巻紋や一筆書きの図像に交じり、複数の刻点で構成される刻点十字紋(pecked cross)が確認されている。この刻点十字紋は、アンソニー・アベニらにより、天文考古学の観点から研究され、テオティワカン文明とのかかわりが指摘されるが、複数の十字が見つかる同地域は、西部地域と中央高原地域の境界上の要衝であることも想定される。さらに興味深いことに、これまで見たこともないようなローカルな刻線画も多数描かれており、同地の重要性が窺える。

ロス・アルトス地域は、古典期中央高原文明の影響が、いかに西部地域に拡大してきたのかを解明するための鍵が眠る重要な地域の一つであろう。



ロス・アガベス遺跡 平面図

18. 「ニカラグア共和国、ラ・パス遺跡(*)の発掘調査」

長谷川悦夫（埼玉大学）

ラ・パス遺跡は、ニカラグア太平洋岸マテアレ市、マナグア湖の湖畔に位置する。湖の岸辺の耕作・放牧地で、先スペイン期の遺物が広範囲にわたって地表面に確認される。この遺跡には、直径約20m、高さ2.8mの石と土で造営されたマウンドがある。メソアメリカの東南辺境とされるニカラグア太平洋岸にあって、この規模のマウンドが残っていることは極めて稀であり、その年代、建築様式や建築のシーケンス、機能に関心が持たれた。報告者は、2015年9月、本年2016年2-3月の二度にわたりこのマウンドで発掘調査を行った。

調査の結果、このマウンドの基部で、粗いながらも面を持つ壁を確認した。未加工の石材を積んだものであり、高さ約50cm以上である。ただし、この壁は3.3mしか続いておらず、いまだ全体像は把握できていない。いずれにせよ、方形の基壇であることは確実であり、植物の茎の圧痕を持つ焼土塊が大量に出土することから、おそらく上部に木舞壁をもつ建物が建てられていたと推測される。

この方形の基壇は、やがて精良な粘土の詰め土で埋められて石材で覆われ、円形のマウンドが形成される。出土土器から見て、この一連の建築プロセスは、サポア期からオメテペ期（後800-1550）にかけて営まれたと考えられる。

ラ・パス遺跡の発掘成果で注目されるのは、方形の基壇の存在であり、このメソアメリカの文化要素が明確に見られる遺跡はニカラグア太平洋岸では希有である。この建造物の機能は未だ明らかではないが、出土遺物が比較的少なく、炭、灰、動植物遺存体などの生活廃棄物も希薄であることから、おそらくは祭祀または埋葬が行なわれたと推測される。

ニカラグア太平洋岸は、後800年頃のオト・マンゲ語族のチョロテガ、それに続くユト・アステカ語族のニカラオの移住によって言語的・文化的にメソアメリカ化したとされる。ラ・パス遺跡の方形の基壇とその後の建築プロセスがこれらの移住とどのような関係を持つのかが今後の調査の焦点となる。

(*)ラ・パス遺跡(La Paz)は、これまでパス・イ・レコンシリアシオン(Paz y Reconciliacion)と呼ばれてきた遺跡であるが、今次調査から略称であるラ・パスを採用することとした。

19. 「グアテマラ、セイバル遺跡と周辺部の航空レーザー測量とマヤ文明の考古学調査」

猪俣健（アリゾナ大学）

青山和夫（茨城大学）

フローリー・ピンソン（サン・カルロス大学）

ホセ・ルイス・ランチョス（グアテマラ国立人類学歴史学研究所）

原口強（大阪市立大学）

那須浩郎（総合研究大学）

米延仁志（鳴門教育大学）

フアン・マヌエル・パロモ（アリゾナ大学）

セイバル・ペテシュバトゥン考古学プロジェクト（団長：猪俣健）と科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表者：青山和夫、平成26～30年度）の一環として、グアテマラのセイバル遺跡と周辺部の400km²において航空レーザー測量（LIDAR）を実施した。航空レーザー測量で地形を遠隔探査した後に地上で踏査を行い、これまで全容がわかっていなかったセイバルの都市の構造を確認した。

(1) 航空レーザー測量によって、1万5000を超える考古遺構と考えられる地点を確認した。

(2) 航空レーザー測量図とハーバード大学が1960年代に作成した遺跡の平面図と綿密に

比較した結果、密集した二次林においては多少の困難が伴うが、航空レーザー測量がセイバル遺跡を厚く覆う熱帯雨林において建造物跡の探査に極めて有効であることがわかった。

(3) ハーバード大学の測量ではその平面の形状がよくわかっていなかったセイバル遺跡中心部の「グループA」の巨大な基壇（610×330 m）が、明確な長方形であったことがわかった。発掘調査の結果、その大部分が先古典期に建造されたと推測される（Inomata et al. 2013; Smith 1982）。

(4) 航空レーザー測量と地上探査によって、「サクベ4」が、「グループA」と「ペック・グループ」を結ぶ、長さ570mのサクベであったことがわかった。さらに「グループA」の北で長さ300mの「サクベ5」を新たに確認した。

(5) 公共広場の西側に神殿ピラミッド、東側に長い基壇を配置した、太陽の運行に関連した儀式建築群「Eグループ」を計11確認した。「グループA」と周辺部のラ・フェリシダ遺跡の「Eグループ」を発掘し、先古典期中期に居住が始まったことがわかった。

(6) 先古典期と比べて、古典期後期・終末期のセイバル遺跡中心部で建造物の密度が高い。

(7) 先古典期と古典期の人間の居住は、水はけの良い高台に集中し、傾斜地を農耕に活用していたと考えられる。

Inomata, T., D. Triadan, K. Aoyama, V. Castillo and H. Yonenobu. 2013. Early ceremonial constructions at Ceibal, Guatemala, and the origins of lowland Maya civilization. *Science*340:467-471.

Smith, A. L. 1982. *Excavations at Seibal, department of Peten, Guatemala: Major architecture and caches*. Memoirs 15 (1). Cambridge (MA): Peabody Museum, Harvard University.

20. 「マヤ人は夜の出来事をどのように記したか」

八杉佳穂 (国立民族学博物館)

マヤの石碑に記されている日付はほとんど間違いなく正確である。しかしいくつかの石碑に日の表記がおかしいものがある。そのなかで、260 日暦または 365 日暦に一日のずれがある例について考察する。

9.14.17.15.11 2Chuen 14Mol (Yaxchilan HS 3 Step 1)

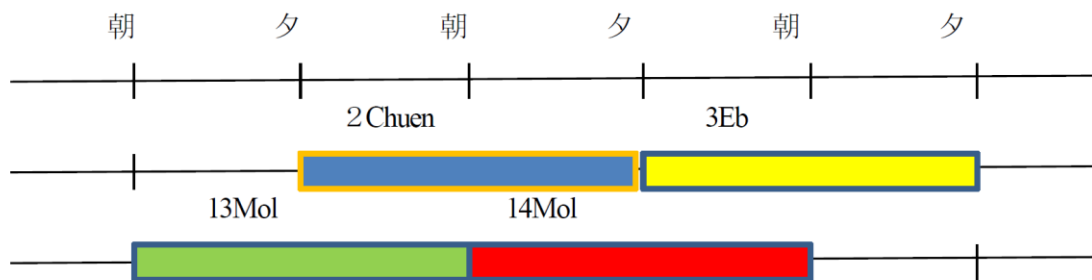
9.14.17.15.11 3Eb 14Mol (Yaxchilan St.18)(正しくは 2Chuen 14Mol)

9.14.15.2.3 3Kan 1Kankin (Dos Pilas St.8)(正しくは 2Akbal 1Kankin)

9.14.15.4.14 1Ix 13Pax (Nim Li Punit St.2)(正しくは 1Ix 12Pax)

9.13.10.1.6 7Cimi 3Pop (Emiliano Zapata Panel)(正しくは 7Cimi 4Pop)

これらは 260 暦と 365 日暦の日の数え方の違いを利用して、昼間の出来事と夜間の出来事を区別してあらわそうとした工夫と考える。



民族誌のデータからは 260 日暦の日は夕方から数えるものであったとみられる。たとえばグアテマラ高地のイシルやハカルテコは 260 日暦の日の始まりを日没から数えた。つまり月の満ち欠けを基本にした暦と考えられる。一方 365 日暦は太陽の年周期にほぼ一致しており、太陽の動きをもとにした暦と考え、夜明けから数える暦といえるのではなかろうか。

『カクチケル年代記』に次のような文がある。

chi ka'-i' Tijax x-Ø-b'oq-otäj ul juyu' chi jun Ajpu (174 章)

「2 ティハシュの日に、フナフプ(アグア)山の土砂崩れがあった」

『カクチケル年代記』は、一年 400 日の暦を用いて、歴史記述を行なっているが、260 日暦の日を利用してあらわしている。それに基づく歴史記述は、マヤ長期暦を引き継ぐもので、長期暦を西暦に変換する式 (Ahau 数 584283 説) とよく合う。2 ティハシュは、長期暦に直すと、11.16.1.15.18 2Etz'nab 16Zip であり、ユリウス暦の 1541.9.10(土)となる。この時代の出来事を簡単に記した『日々の記録 Efemérides』によると、アグア山の土砂崩れは 9 月 11 日 (日) の *madrugada* であったという。ということは、260 日暦は日没から数える

暦とする考えと矛盾しない。

暦は日より小さな単位（時間）を考慮しないものである。しかし歴史記述においては、一日のある特定の部分に言及したいこともあったに違いない。260 日暦と 365 日暦の日が合わない例は、それをあらかず工夫であったと考えられる。